
平和主義

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和主義

【Nコード】

N6000Q

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

強国に囲まれながらも軍隊を持っていないコスモポリタン共和国。それを聞いた者がその国に行って見たものは、『軍隊』がなくとも国は守れます。名前が違っただけですが。

第一章

平和主義

「軍隊がないって!？」

「そんな国があるのか!？」

皆その話を聞いてまずは大いに驚いた。

「そんな、それでやっていけるのかね」

「無理じゃないのか？」

「なあ」

そして誰もがこう言いだした。

「軍隊がなくて誰が国を守るんだ？」

「非武装中立か？」

「いや、それはナンセンスだろ」

幸いにしてここにいる誰もが非武装中立だのそうしたことでは何かができるとは思っていなかった。そんなことをすればどうなるかだ。

「そうになってみる。隣にソ連みたいな国があればな」

「平和勢力の国があればか」

「ああ、そういう国があればだよ」

これは皮肉であった。ある国の知識人達はソ連を共産主義だから『平和勢力』と呼んでいたのだ。果たしてそれが真実かどうかは歴史にある通りだ。

「一発で攻められるよな」

「まあ攻められたいんなら非武装中立もいいけれどな」

「後が怖いけれどな」

だからこそどの国も軍を持っているのだ。軍は何の為にあるのか、言うまでもなくその国を守る為である。まさにそれが存在理由だ。

「けれどその国は軍隊がないって？」

「どの国だよ、それ」

「何でもコスモポリタンというらしいな」

それがその国の名前だ。

「東の位置にホワイトイーグル合衆国、西に青龍人民共和国があるんだよ」

「おい、あの二国かよ」

「また物騒だな」

言わずと知れた世界の二大国である。昔からあちこちの国に武力介入したり侵略をしてきたりしている。そうした国なのだ。

「北にはピロシキ共和国、南には太陽皇国だけだな」

「南の太陽皇国だけがまともだよな」

「北もえげつないな」

「それでそのコスモポリタン共和国だ」

その国のことも話される。

「四国に囲まれる位置にあってな」

「軍隊がなくても国をやっているのか」

「どうやってだよ」

「そんなことができるのかよ」

「けれど攻められることなくな」

その四国から侵略されていないのだという。

「平和にやっているとってらしい」

「嘘だろ」

「出鱈目だろ」

何人かはその話を聞いてすぐにこう言い出した。

「そんなことできるか」

「無理だ」

「不可能だ」

そしてこうも言うのだった。

「絶対何処かに攻められる」

「太陽は攻めないだろうが後の三国はな」

「間違いない攻めるだろ」

「けれど実際にやっているとってるからな」

またこのことが言われた。

「その国な」

「外交が上手なのか？」

「それともあれか？四国の命綱握ってるのか？」

「金融か何かで」

「続いてこんなことが予想された。

「それでも軍隊ないと無理だしな」

「スイスだって国民皆兵だしな」

「なあ」

実はスイスはそういう国だ。何かあればすぐに総動員がかけられる。そうしたかなり凄まじい国防政策で国を守っているのだ。

「軍隊なくてやっていけるか」

「絶対に無理だろ」

「本当に嘘じゃないのか？」

「いや、それがな」

しかしまたこう言われるのだった。

「軍隊は本当にないらしいんだよ」

「じゃあ一回確かめてみるか」

「ああ、そうするか」

「この目でな」

こうしてであった。彼等は実際にそのコスモポリタンに向かった。

そこは半島であり本当に四国から影響を受ける場所にある。四国から比べれば実に小さい国である。

第二章

人口は千万程度だった。普通の国では多い方だが周りが凄過ぎた。

「四国は何処も平気で人口一億超えてるからな」

「太陽皇国で一億二千万だしな」

「それが一番人口少ないからな」

平気でコスモポリタンの十倍以上である。

「やっぱりどう考えてもな」

「侵略受けるよな」

「軍隊ないとな」

そんな話をしてコスモポリタンに入った。するとだ。

国はそれなり以上に繁栄していた。ものは豊富で人の行き来は多い。市場には人もものもこれでもかと溢れていた。

経済的には豊かなのは間違いない。だがそれこそがだ。

「あの四国が涎垂らすよな」

「間違いなくな」

「確実にそうなるだろ」

やはりそう見る彼等だった。そうとしか考えられなかった。

そしてここだ。警察が彼等の前に来た。コスモポリタンの警察だ。

「あれ？」

「あれが警察か？」

「あれでか？」

彼等はその警官達を見て驚いた。何とだ。

警官の制服にヘルメットである。制帽ではなかった。その制服も迷彩でありかなり物々しい。そしてその手にはである。

「機関銃か」

「何か物騒だよな」

「警官の装備じゃないな」

「そうだな」

そしてだ。その車はだ。

「……………戦車だよな」

「それに装甲車か」

「警察かよ、あれで」

今度はそれを見たのである。何と戦車と装甲車が一両ずつ道を進んでいたのだ。完全武装の兵士達も同行してだ。かなり物々しい。

「戦争でもするのか？」

「だからこの国は軍隊がないだろ」

「そうだけれどな」

それでもなのだった。

「戦車とか装甲車持つてるのってな」

「軍隊しかないからな、普通は」

「普通はな」

これが彼等の常識だった。

「けれどな。実際にな」

「ああ、戦車に装甲車か」

「しかも警官が機関銃持って」

「あれは何だ？」

いぶかしずにはいられなかった。

「軍隊みたいだよな」

「そうだよな」

「それに」

ここだ。空の上から強く鋭い音が聞こえてきた。それで見上げるとだ。

飛行機が飛んでいた。しかもそれは最新鋭の戦闘機だ。それが編隊を組んでだ。青い空を見事に飛んでいたのである。

彼等はそれを見てだ。また話した。

「あれ、戦闘機だよな」

「そうだよな」

「それだよな」

どう見てもそれだった。

「だから。軍隊ないんだよな」

「それで何でなんだ？」

「あんなものがあるんだ？」

「おまけにな」

その戦闘機を見るとだ。さらにわかった。

動きがいいのだ。よく訓練されている。それが明らかだった。

「どうなってるんだ？」

「本当に軍隊ないのか？」

「あんなものがあるなんて」

「どういうことなんだろう」

彼等は疑念を抱かざるを得なかった。しかもだった。

海に出てみる。港だ。そこには巨大な軍艦が何隻もあった。しかも潜水艦のようなものもあった。ヘリさえ飛んでいたのだ。

「軍港だよな」

「どう見てもな」

「そうだよな」

また話された。

「どういう場所なんだ、ここは」

「警護が厳しいな」

「おい、あれ」

水兵だった。彼等も港にいた。しかも左手には階級章もあった。

第三章

「何で水兵までいるんだ」

「これだけ軍艦があつて」

「どういう場所なんだ」

「ああ、ここですか」

いぶかしむ彼等にだ。その水兵の一人が声をかけてきた背が高く立派な身体をしている。その彼が来たのである。

「ここは海上警察の港です」

「海上警察!？」

「何ですかそれは」

「我がコスモポリタン共和国では警察は三つあります」

水兵はいぶかしむ彼等に説明してきた。

「この海上警察に航空警察」

「航空警察」

「そういうものもあるんですか」

「それに陸上警察です」

この名前の組織も離された。

「合わせて三つの警察があつて警察省の管轄になっています」

「警察省」

「そうした官庁があるんですか、この国には」

「我が国の治安と守りを担当しています」

水兵はこうも話した。

「そうした場所です」

「えっ、それだと」

「まるで」

「軍隊じゃないですか」

「しかも」

ここのだ。彼等はあらためて水兵の左手を見た。やはりそこには

階級章があった。そこには三本線のラインが描かれていた。

「それは階級章ですよね」

「そうですよね」

「それは」

「はい、そうです」

水兵はあっさりとした調子で言葉を返した。

「その通りです」

「警察に階級がある」

「それは私達の国でも同じですが」

「しかしそれは」

「私は士長です」

こう話すのだった。

「士、曹、尉官、佐官、そして将官がありまして」

「そのまま軍隊の階級では？」

「違いますか？それって」

「そうではないのですか？」

「そうですかね」

水兵はここでもあっさりと返した。

「まあ似ているかも知れませんが」

「いえ、そうではないでしょう」

「そのままです」

「そうではないのですか？」

「まあ国防を担当していることは間違いありませんね」

水兵の口調は変わらない。

「それが我が国では警察の仕事です」

「軍隊はなくとも」

「そうしたものはある」

「何か違うのでは」

「おかしいですか？」

今度は水兵の方がいぶかしむ顔になった。

「それは」

「おかしいというよりは」

「やっぱり軍隊ですよね」

「それじゃあ」

「ですから軍隊ではありません」

水兵はそのことはあくまで否定した。頑とした口調でさえある。

「それは事実です」

「しかしこれではです」

「軍隊にしか思えません」

「そうとしか」

「しかし国は守らないといけないですよね」

水兵が返してきた言葉は正論だった。

「そうですね」

「それはそうですが」

「事実そうです」

「その通りです」

これは彼等もとてもわかっていることだった。わかっている筈がなかった。国防の必然性をわかっていない者は全くの無知か何らかの意図でわかっていないふりをしている者だけである。

第四章

「しかしこの国に軍隊はないと聞いたので」

「それで来たのですが」

「警察がありましたか」

「我々は警官です」

水兵はこのことも確かに話した。

「それに他なりません」

「兵隊さんではなくですね」

「警官ですか」

「そうなのですか」

「そうです。公務員です」

「ううむ、軍人も公務員ですが」

「それでも」

違和感はだ。どうしても拭えなかった。

「何か。どうしても」

「そうだよな。ちょっと」

「納得しろと言われても」

「まあそれが我が国です」

水兵はどうしても頭の中では納得できない彼等にまた告げた。

「そういうことですから」

「そうなのですか」

「軍隊はなくとも国は守る」

「そういうことですか」

「はい、そうです」

まさにその通りだというのであった。

「そしてそれは我が国では警察が担当しています」

「国の治安維持と含めて」

「成程」

「そういうことなのですか」

「はい、お陰で我が国は平和です」

水兵は今度は平和を口にした。

「守りがしっかりしていますから」

「守りがですか」

「それが」

「確かな備えがあつて」

そのまま軍備になる話だった。それはだ。

「おまけにいざという時にはです」 8

「何かありますか？」

「その場合は」

「国民が全て銃を持ちますし」

話がかかなり物騒なものになった。

「敵が来たその時はです」

「国民が全てですか」

「銃をですか」

「実は我が国は男女共必ず一度は警察に入隊することになっていま
す」

彼等はそれを聞いてだ。すぐにわかった。それはどういうことか
だ。

「つまり。兵役だよな」

「そうだよな」

「それだよな」

すぐにそれだとわかったのである。

「徴兵制敷いていたのか」

「道理でここまで軍隊がしっかりしているよ」

「本当にな」

警察と聞いてもだ。もう軍隊にしか思えなかった。

そしてだ。水兵はさらに話すのだった。

「私ものです」

「貴方もとは」

「まさか」

「はい、義務で警察に入っています
そうだというのである。

「海上警察を選んで。三年目です」

「三年目ですか」

「それだけ経っているのですか」

「どの警察も入隊は三年で。これで終わりです」
屈託のない顔で話すのだった。

「そして三年目が終わればです。大学に入ります」

「大学にですか」

「そういう年齢なのですね」

「そうです。ただそれからも定期的に訓練があります」

それもあるのだという。話はさらに軍事的なものになる。

「死ぬまであります」

「エルサレム共和国みたいだよな」

「そうだよな」

「それじゃあな」

彼等が脳裏に浮かべた国はその国だった。周りが敵国ばかりで何かあれば戦争をしている国だ。その国をなのである。

「そうか、それでか」

「そこまで武装をしているから」

「それでやっていけるのか」

「周りが大国ばかりでも」

「金融もやってますし経済活動にも力を入れてますがね」
水兵の今の言葉にもこの国の国防政策があった。

「周りの国々にお金を貸して。経済協力もしていますし」

「それで弱みとか握ってるんだな」

「攻められないように」

「経済とか金融でもか」

「そして自分達で政治を行い」
今度はそれだった。

「しっかりとしてますから」

「移民は受け入れないか」

「純潔主義か」

「観光客はともかく」

「我が国はしっかりとしていますよ」
水兵は胸を張って語った。

「これからそうしていきます」

「ううむ、何か軍隊がなくてもな」

「そうだよな」

「それでもだよな」

「守ってるんだな」

彼等は口々に話していく。

「何か平和主義と一口に言ってもな」

「ただ平和は手に入らない」

「そういうことか」

そしてあらためてわかったのだった。このことがだ。
そのうえでだ。水兵に対して話した。

「貴国は軍隊がなくても万全ですね」

「警察がいて経済も金融もしっかりしているから」

「それでなのですな」

「はい、我々は平和を守ります」

守るというのであった。

「例え何があっても」

「わかりました」

「そういうことですね」

彼等も水兵のその言葉に頷いた。

「我々もまた。そうしていくことにします」

「我々のこの手で」

「そうですよね。平和は言うだけで手に入るものではないですから」
水兵はまたこうしたことを言った。

「守るものですか」

「ええ、本当に」

「よくわかりました」

皆水兵との話で心からわかったのである。今彼等はわかった。軍隊がなくともそれに代わる組織がある場合もある。そして平和とはだ。願って手に入れるものではなく手に入れてから守るものである。そのことがだ。

平和主義 完

2010・8・5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6000q/>

平和主義

2011年2月2日21時40分発行